

沈文敏は、『星期評論』の編集に従事し、中共創立に加わり、前農民協會を組織し、五・三〇前夜に脱黨して、戴季陶とともに江浙地區での國民會議運動をおしすすめ、北伐の進展にともない、二五減租の推進、農民協會の再建、地方自治の實現につとめていたもので、彼の死はいずれにしても中國動亂の一過程を象徴するものであった。ここでは、とくに二五減租の問題とからめて、その死の意味するところを考えてみることにしたい。

堯舜民主政？

島田 虔次

横井小楠は歐米の大統領制・民主政體を讚美しているが、その甥のアメリカ行を壯んじにしては「明堯舜孔子之道、盡西洋器械之術、何止富國、何止強兵、布大義於四海而已」といった。堯舜孔子の道は民主主義の上乗なるもの、あるいはそれを既に止揚せるもの、と解せられたのであろう。

堯舜の道をどのようにイメージすることは果して可能であるか。それは可能であると思われる。つまり堯舜禮讓を公舉公選と考えるのである。そのように考えて堯舜を伯理爾天徳（Berliertentend）と見なした例が清末に、顯著に、ある。その例を示しつつ、且つ関連する二三の問題を論じたい。

清初史料に關する二三の問題

松村 潤

入關前の太祖ヌルハチ、太宗ホンタイジに關する史料の根本となるものは、一九〇五年内藤湖南博士が現在中國東北地方の中心である瀋陽の盛京宮殿で發見將來された『滿文老檔』とされているが、一九三一年にその原本三七冊が清の内閣大庫より發見され、ついで一九三五年には、これらと同じ性質の三冊の檔冊も發見された。しかし日中戦争によつて、その研究は中断され、その本格的な研究が始められたのは、一九六九年臺北の故宮博物院から、これら四十冊の檔冊を影印本十冊にまとめ『舊滿洲檔』と題して刊行されてからである。その結果、判明したことは、『滿文老檔』は從來想像されていたような原檔の、そのままの形態の忠實なコピーではなく、乾隆の史臣による編纂の手が加えられていることである。したがつて今後の入關前史の研究は『舊滿洲檔』に據らねばならない。

また現行の大清歷朝實錄に收められている太祖・太宗・世祖のいわゆる三朝實錄は、いずれも乾隆の改訂本であつて、初纂本の内容とは多大の隔りがあり、その史料の價値は江戸時代に我が國に傳來した康熙本の三朝實錄に劣ることは、つとに清初史研究者の指摘するところであつたが、臺北の故宮博物院に所藏されている漢文の『太宗實錄』は順治初纂本であることが認められた。したがつて今後の太宗時代の研究は、この初纂本に據るべきであらう。さらに同院所藏の滿漢文の『太祖武皇帝實錄』は順治重鈔本であり、乾隆重

鈔の『滿洲實錄』と深いかかわりをもつことも判明した。

契丹・女眞文字考

田村 實造

契丹文字に大字と小字とがあることは『遼史』その他の記載によって知られるものの、つい半世紀前までは、それがどのような字形のものかさえ明らかでなく、いわゆる「幻の文字」といわれていたが、昭和七年「慶陵」から契丹文哀册碑石が出土するに及んで、ようやく確認されるようになった。爾來、日本・中國をはじめ各國の東洋史家や言語學者によって、この文字解讀への努力がかさねられてきたが、未だ誰人も解讀に成功したことをきかない。

女眞文字にも大字・小字の二種があり、『金史』などによると「契丹文字の制度に倣まねって作られた」とあるから、契丹・女眞兩文字は姉妹關係にあるといえよう。幸に女眞文字に關して、「大金得勝陀の頌碑」・「女眞進士の題名碑」をはじめ數基の金石文が存し、また文書の類にも明代の『女眞館譯語』などがあつて、その資料はかなり豊富だといえる。そのため女眞文字の解讀は、契丹文字に比べてはるかに進んではいるが、しかしこの文字についても未だ十全に解讀されたとはいひ難い。それに、これまで知られた資料はすべて女眞小字だと考えられており、大字については全く知られるところがない。

このような契丹・女眞文字の研究の現状をふまえて、兩文字の形態・音價・構造を考へつつ解讀へのささやかな試みを披露してみた。